

人が出会う、土と触れ合う

— 草刈り十字軍 40年 —

農業の実践者を育ててきた足立原貫氏。

山林の農薬散布に反対して立ち上げた「草刈り十字軍」を続けて今年で40年。

第11回参加者であり、信州大鹿村に住むサイモン・ピゴット氏を迎え

インテック最高顧問の中尾哲雄が聞き手となって

人、土、哲学について語り合った。



聞き手

株式会社インテック
最高顧問

中尾 哲雄

足立原 貫氏

NPO法人農業開発技術普及会 農道館理事長
草刈り十字軍運動本部代表

翻訳家

サイモン・ピゴット氏



鼎談

人が出会う、土と触れ合う

—— 草刈り十字軍 40年 ——



サイモン・ピゴット氏

イギリス生まれ 日本の文化と風土を愛し、信州の大鹿村に住み、釜沢自治会長と宇佐八幡社の氏子総代の副総代長を務める。小規模自治体の維持、日本の伝統文化の継承、個人の自由を尊重する社会の実現を心にかけている。

ピゴット 昭和47年、41年前に来ました。外国で住み、外国で仕事がしたい、異なる文化に触れながら学んでいきたいと思ったからです。33歳のとき日本人の女性と結婚。東京から長野の山村に移りました。家族で住むには、できれば自然の中と思いをましてね。その頃、small is beautifulという運動が提唱されていて、小さな規模で生活したいと思ったわけです。「草刈り十

字軍」に参加して足立原先生と知り合いになったのはその頃です。
中尾 「草刈り十字軍」のご感想は。
ピゴット 仕事は面白く、多くの人に出会いました。山で共生する共同体を実感できました。日本人はどうしてこんないい所に住みたくなのだろうと不思議に思いました。私は農業者ではありませんが、自然の環境が好きなんです。8歳から16



あだちはら とおる 足立原 貴氏

1930年、東京生まれ。東京大学農学部卒。富山県立大学短期大学部教授。同学部長。1996年退職。その間、1967年に廃村を拠点に開始した農業実践を基軸に、幅広い活動を続けている。

中尾 おはようございます。今日は「草刈り十字軍」で有名な足立原貫先生、長野の下伊那から来てくださったサイモン・ピゴットさんとお話できること、とてもうれしく思います。足立原さん、「草刈り十字軍」、今年で40年。ピゴットさんも何回目かに参加されましたね。
ピゴット ちょうど30年前の1984年、家内といっしょに参加しました。
中尾 限界集落を飛び越えるようにして廃村になった旧大山町(富山市)の山村に

足立原さんが「人と土の大学」をつくられました。当時は大きく報じられました。
足立原 50年前、私は大分県の農業試験場から富山に転勤してきました。当時の日本の農業は、じいちゃん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃんの4ちゃん農業といわれていました。父ちゃんが他に働きに出て、3ちゃんに、そして母ちゃんも抜けて2ちゃんになろうとしていた頃です。そして一家挙げて離村する「挙家離村」が起こり始めていましたね。
中尾 高度経済成長とともに廃村が増えていった。私は山村で育ったので、そのことがとてもさみしく、悲しい感じがしたな。
足立原 私が富山にやってきたのは、研究者ではなく実践者を育てようという使命を帯びてです。戦後食糧難の時代に、肺結核になりました。16歳のときでした。母が着物を一枚ずつ、サツマイモに換えてきてくれたお陰で私は生きのびたんです。
中尾 私の村はサツマイモの産地、町の人たちが着物を持ってイモと交換していきました。足立原さんの、サツマイモから「土」への目覚めですね。
足立原 食べものは八百屋ではなく「土」からくる。「土」は人の命を支える確かなもの。だから土に触れる仕事がしたい。東大の田無の農場でトラクターの操縦を覚え、そしてトラクターを使う農村の現場を見たくて、北米、南欧の農村を歩き



人と土の大学

ました。海外渡航がまだ困難な時代でしたが、貨物船に乗って日本をとびだし、袋一つ背負っての一人旅でした。
中尾 そろそろ「人と土の大学」についてお願いします。
足立原 昭和41年の夏、農家の次男坊だという一人の学生が、「南米に行つてでっかい農業をしたい。親を捨てるべきか、夢を捨てるべきか迷っている」と相談にきたんです。そこで、時代の行方を見据えた農業実践の場をつくらうということになったんです。捨てられた「小原」という廃村を見つけて、「地球を耕そう」を合言葉に学生2人と農業実践を始めました。
ピゴット それが「人と土の大学」の芽になったんですね。

反対には対案を

足立原 人が出会う、土と触れ合う、そして新しい人生の哲学を… 私たちの活動に東大の山崎正一教授(哲学)がたいへん関心を抱かれました。そうして始めた「大学」5年目、小原の裏山に「農業散布」の看板がたてられ、大騒ぎになりました。
中尾 そこで、農業はやめてくれ、オレたちが草を刈るから、ということになったわけですね。やがてピゴットさんも参加した。ところでピゴットさん、何故、いつ日本に来られたんですか。

歳まで育ったイギリスの村が、記憶の中で一番美しいところです。子どもが生まれたらこんなところで育てたいと思っていました。
中尾 さて、農業散布に反対した「草刈り十字軍」、「反対には対案」という足立原さんのことばに私もあの時感動しました。大きな鎌をいくつも買って私が持っていました。憶えていらつしやいますか。
足立原 よく憶えていますよ。時代が時代でした。世界中で若者の反乱が起こっていました。20世紀文明が成熟し過ぎて腐熟しはじめていました。でも、ただ反乱しただけ。反対して、それを止めさせるには対案を出すべきです。対案を出すという事は相手に知恵を貸すということでしょう。そしてその対案をオレが実行してやる、それが「草刈り十字軍」運動なんですよ。
中尾 それがもう40年続けられている。平成8年、加藤剛さん主演で映画にもなりました。「草刈り十字軍」の成果、意義についても少し。
足立原 自然の森林と人間が共生していく時には、問題は何も起きないけど、人間が人工林を作りはじめた。苗を育て木を植え、それが育つように草を刈ってやらなければならぬ。そこに効率よくやろうと文明の流れに乗ってくるわけですね。手間をかけない、道具の機械化、薬を撒いて草を殺しちゃう。昆虫たちも死んでしまいま



鼎談

人が出会う、土と触れ合う

—— 草刈り十字軍 40年 ——

ピゴット 英国と日本は似ているというよりは同じです。基本的には人々がそれぞれ個性を生かしながら多くの人々と仲良く住んでいる。そして地域の伝統、昔からの生き方を少なくとも残そうと努力している。でも、それはたいへんなこと。若者が出て行く、小さな会社がなくなっていく、日本と同じですね。

中尾 「個性を生かしながら」について、ちょっと話させてください。明治の初めの頃、来日したアメリカの天文学者パーシヴァル・ローエルはその著『極東の魂』のなかで、日本は地球の裏側にあつてすべてにおいて西洋人と逆だ。極端な家族主義、家父長制が支配して、人々は没個性、発育不全とまでいつているんです。

ピゴット そうなんですか。

中尾 これに対し、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)はローエルの日本人論は恐るべき推論。個性がないのではなく、それは日本



農を捨てた時、日本は終わる

中尾 土から遠ざかることを、高度で高尚とするかのような現代の先進国都市型

す。文明はどうしてこうなったんだろう。人間が身体を動かさなくなってきたからだと思ひ至り、人の手で草を刈ろう、草を刈ること自体が教育の場になると思ひたんです。



文明に二石を投じる、ということですね。そして先生の文明批評の実践、それが草刈りということですか。私は農を捨てた人間。昔、吉田実富山県知事に「君は農を捨てて町に来たが、心の拠り所、精神の居場所はあるかと、農にあることを忘れるなよ。農業が衰退したとき日本は終わる」といわれました。トインビーも同じことをいっています。インテックでは、数年前から梨の栽培を社員でしていますが、やがてより大きな農業をやつていきたいと思ひます。ピゴットさん、日本の農離れをどう思ひられますか。

ピゴット 私は足立原先生のいろんな運動のなかで、廃村についてとくに深く興味をもつています。先生の著書「一つの社会の死から」では、廃村を「ある社会の死」と捉

人の天性の謙虚さであり、個を抑えて折り合う、折衷主義はむしろ日本人の積極的な特性といつているんです。今はオレが、オレがかつてきました。

ピゴット パーシヴァルは間違つていると思ひます。日本人は仏教的ですね。自分の我をなくして、もっと高いレベルの我にしているんです。西洋にも和があります。議論する、そして反対の立場の人は自然の法則で歩み寄つていく、最後に俗にいう妥協になるわけです。

中尾 日本の和は、たぶんそうなるであらう



社員で梨の栽培 (富山市呉羽丘陵)

えられた。廃村となると村がなくなるだけではなく、文化、自然環境がかわり、いろんなものが死んでしまう。自分が住みたいと思ひ村がどうして死んでいくのか、であれば自分が住んで、子供を育てたいと思ひたんです。私は今、大鹿村(長野県)の釜沢という小さな集落にいますが、「草刈り十字軍」の経験、富山でみてきたことなどにとっても勇気づけられています。

中尾 「一つの社会の死から」の出版記念会でスピーチをしたこと想ひ出しました。40年ぐらい前のことです。ところで山崎賞は何年になりますか。

足立原 これも40年になります。山崎先生が東大を退職なさるとき「大学からお金をもらえらんだ。邪魔にはならないが使ひ方が大事。君にあげるから使ひ方は考える。僕の哲学を実践すると君の生き方になるんだ」といわれたのです。それで山崎賞をつくらうということになったんです。

中尾 哲学に賞を出すというのはあまりないでしょうね。

足立原 だから話題になつたんです。実利的な見返りのある学問ではないでしょう。山崎先生も賛成して、選考委員会をつくらうと決まりました。

大山町で「山崎賞」授賞式

中尾 11回目から何回か大山町でも授



屋根の上のピゴットさん



ピゴットさん宅

うということに対し、自分をそこに合わせるべく、妥協というより折り合いをつける折衷かな。

ピゴット 私は、住んでいる村で自治会長を5年していますが、ここで生まれた人とあとから来た人がよくぶつかるんです。喧嘩にもなりますが、いつか妥協するんです。和の精神かな。というより、その地域で何百年の間に、多分無意識のうちに人間のつき合いをうまくやつていけるようになつた、やはりDNAかな。



鼎談

人が出会う、土と触れ合う

—— 草刈り十字軍 40年 ——

耕士百家の郷

中尾 ところで、足立原さん。「人と土の大学」の茅屋を改修というより転生、生まれ変わらせましたね。私も少々協力させていただきました。こんどは「耕士百家の郷」と名づけられたんですね。

足立原 「耕」は人が生き続ける営みの原型。「土」はコトに当たり、コトを処する、知恵と力を発揮できる者。「百家」は一家言を抱くさまざまな人物、と認識しての造語です。

中尾 あの小原の山に行くと、少年の頃が甦ってなぜか落ちつくんですね。8月には転生の館を見に行きますよ。



人と土の大学(1964年)

足立原 人類の歴史は都市の歴史という先哲の言葉を改めて思い知らせる現代の人類社会。便利さが満ちている一方、人に便利さをもたらしているモノやコトを動かしているのは何か。それは、日々の暮らしに必要としていることを誰かがしてくれらるという仕組み、そんな「人工生活環境装置」なんですね。都市の暮らしを幾時間でも幾日でも脱して、あらためて「生きる」とはどういうことか。「生き続ける努力の営み」の原型から思考して、「生き直す」知恵と力を育む場と機会をひとりでも多くの人に提供しようとするものなんです。
ピコット すばらしいね。農業の能率主義、合理主義がやがて環境や土地に影響を与えていく末路を私もみてきました。一方、廃村になりかかっている地に若者が入ってきて、もう一度、息を吹き返しているところもあります。日本の農業も少しずつ変わるんじゃないでしょうか。希望をもっているんです。

今度は「日本学」 富山に哲学の風土を

中尾 精神の都市化、怖いですね。さて、「人と土の大学」、「草刈り十字軍」、「山崎賞」、「エオリア会」、そしていま、「耕士百家の郷」。そしてそれらをベースにして「日本学」というわけですね。

足立原 日本を研究していくには、人工生活環境装置である都市ではなく、日本の色、匂いの源泉である地方の山村に拠点を置きたいんです。その拠点をいままでの縁を考えて富山としたいんです。私の考える「日本学」、こんどゆつくりお話しさせてください。

中尾 足立原先生と「人と土の大学」の延長として、富山県の大山町に哲学をベースとした大学をつくろうと活動を始めた頃を懐かしく思い出しています。われわれの志とは違った大学になりましたね。「日本学」の拠点として、新たに富山に哲学の風土が醸成されていったらいいな。

「若返り」の大合唱の中で、今日は高齢者対談となりました。でも、足立原先生も書いておられますが、先が短くなるという事は、過去が長くなるということ。それは語れる過去が多くなり、経験も豊かになっていくということでしょう。お互い元気にいきましよう。ありがとうございました。



撮影場所 玄徳館(富山市開ヶ丘)

富山県魚津市にあった中尾哲雄の実家を提供。移築して改築し、現在は交流館として地域に利用されている。